

FD 実施委員会主催

**2014（平成26）年度
全学FDワークショップ**

実施日：2014年8月20日（水）・21日（木）

場所：東京薬科大学 教育5号館



2014 FD-WS 報告書

目次

- ・スケジュール … 1 頁
- ・参加者名簿 … 2 頁
- ・ワークショップの様子 … 3～6 頁
- ・TP アンケート結果 … 7～10 頁
- ・終わりに … 11 頁

2014(平成 26)年度 全学 FD ワークショップ

主題：「学生の成長をどのように支えるか」

日時：2014(平成 26)年 8 月 20 (水), 21 日 (木)

場所：本学教育 5 号館 3 階

8 月 20 日 第 1 日

- 9 : 00 集合
- 9 : 30 オリエンテーション
- 9 : 45 KJ 法
- 10 : 00 SGD (1)
- 11 : 30 発表 1 (5 グループ) と総合討論
- 12 : 15 昼食
- 13 : 15 ミニレクチャ：カリキュラム基本構造 (目標、方略、評価)
- 13 : 45 作業説明：学生評価の実際について、自らの経験をもとに、討議する
- 14 : 00 SGD (2)
- 15 : 45 コーヒーブレイク
- 16 : 00 発表 2、総合討論
- 17 : 00 第一日のアンケート

8 月 21 日 第 2 日

- 9 : 00 集合
- 9 : 15 第一日のアンケート発表
- 9 : 30 東京医科大学におけるカリキュラム改革—新しい評価法の導入
レクチャとミニワーク
東京医科大学 医学教育講座 教授 泉 美貴 先生
同 兼任助手 油川ひとみ 先生
- 12 : 00 昼食
- 13 : 00 教育評価とティーチングポートフォリオ
レクチャとミニワーク
大阪府立大学工業高等専門学校 教授 北野 健一 先生
- 15 : 30 コーヒーブレイク
- 15 : 45 作業説明と SGD (3)
- 16 : 45 発表 3
- 17 : 30 アンケート、閉会式

東京薬科大学 2014年度FD-WS 参加者名簿

ディレクター 学長 笹津 備規

A	1	稲葉 二郎	准教授	薬学基礎実習教育センター	タスクフォース 大野 尚仁 岡田 克彦
	2	多田 壘	助教	薬物送達学	
	3	中瀬 恵亮	助手	病原微生物学	
	4	山岸 明彦	教授	極限環境生物学	
	5	青木 元秀	助教	生命分析化学	
	6	尹 永淑	助教	分子生物化学	
	7	橋本 吉民	助教	細胞制御医科学	

B	1	安達 禎之	准教授	免疫学	タスクフォース 渡邊 謹三 藤川 雄太
	2	高柳 理早	准教授	臨床薬効解析学	
	3	黒田 明平	講師	漢方資源応用学	
	4	吉田 君成	助教	薬学教育推進センター	
	5	高橋 勇二	教授	環境応用動物学	
	6	佐藤 典裕	講師	環境応答植物学	
	7	佐藤 礼子	助教	ゲノム病態医科学	

C	1	山口 宜秀	准教授	機能形態学	タスクフォース 杉浦 宗敏 熊田 英峰
	2	三浦 典子	准教授	薬学教育推進センター	
	3	恩田 健二	助教	臨床薬理学	
	4	高橋 浩司	助教	薬学基礎実習教育センター	
	5	井上 英史	教授	分子生物化学	
	6	中村 由和	講師	ゲノム病態医科学	
	7	新崎 恒平	助教	分子細胞生物学	

D	1	森川 勉	教授	薬学教育推進センター	タスクフォース 横山 晴子 福田 敏史
	2	保住 建太郎	講師	病態生化学	
	3	大友 隆之	助教	総合医療薬学講座	
	4	秋元 賀子	助教	生化学	
	5	浅野 俊雄※	教授	教職研究室2	
	6	萩原 明子	准教授	言語科学	
	7	若菜 裕一	助教	分子細胞生物学	
	8	佐藤 健吾	助教	心血管医科学	

※20日のみ参加

E	1	大野 真	教授	第2英語	タスクフォース 濱田 真向 玉腰 雅忠
	2	武井 佐和子	講師	薬学実務実習教育センター	
	3	藤野 智史	助教	衛生化学	
	4	田中 祥子	助教	臨床薬理学	
	5	梅村 知也	教授	生命分析化学	
	6	伊東 史子※	准教授	心血管医科学	
	7	志賀 靖弘	助教	応用微生物学	

※20日のみ参加

ワークショップの様子

1日目



開会式



SGD 1



発表・合同討論 1



SGD 2



発表・合同討論 2

2日目



東京医科大学 泉先生 講演



東京医科大学 油川先生 ミニワーク



大阪府立大学工業高専 北野先生 講演



大阪府立大学工業高専 北野先生 ミニワーク





SGD 3



発表・合同討議 3



閉会式

東京薬科大学 第4回全学FDワークショップ アンケート結果

講演日時：2014年8月21日（木） 13:00～15:30

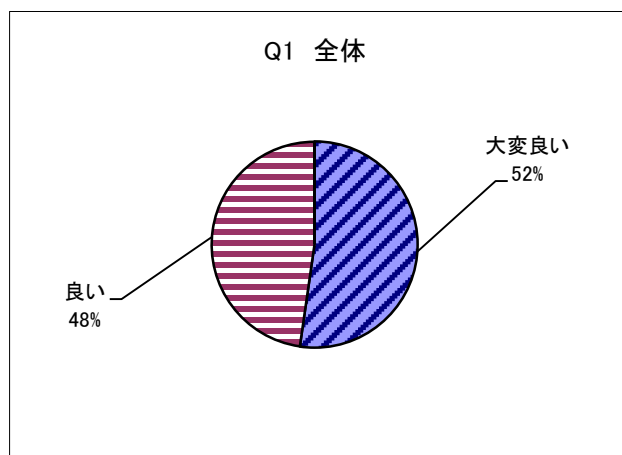
講演場所：東京薬科大学 教育5号館 5301講義室

講師：大阪府立大学工業高等専門学校 北野健一

アンケート回収：44通

Q. 1 今回の講演会は全体としていかがでしたか。

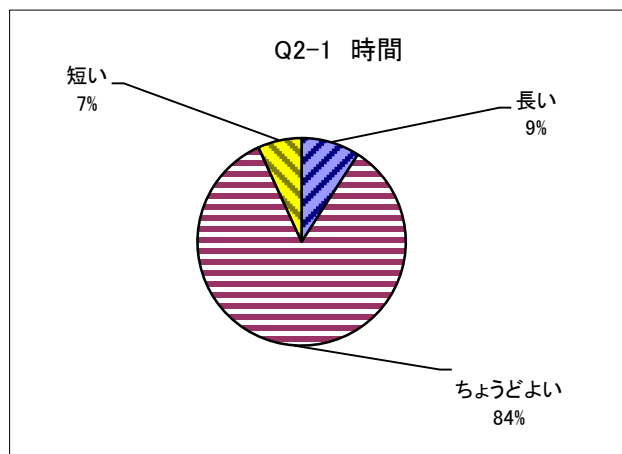
- ①大変良かった 23名(52%) ②良かった 21名(48%)
③良くなかった 0名(0%) ④全く良くなかった 0名(0%)



Q. 2 今回の講演ではティーチング・ポートフォリオを理解していただくことが第一の目的でした。この目的を達成するために、

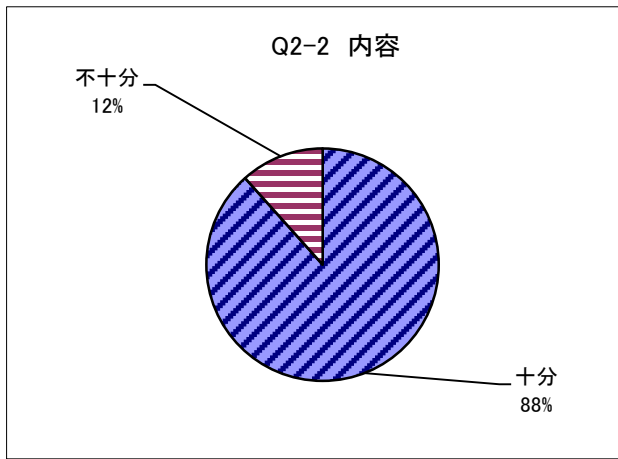
2-1 講演時間はいかがでしたか。

- ①長い 4名(9%) ②ちょうどよい 37名(84%) ③短い 3名(7%)



2-2 講演内容についてはいかがでしたか。

- ①十分であった 38名(88%) ②不十分であった 5名(12%)

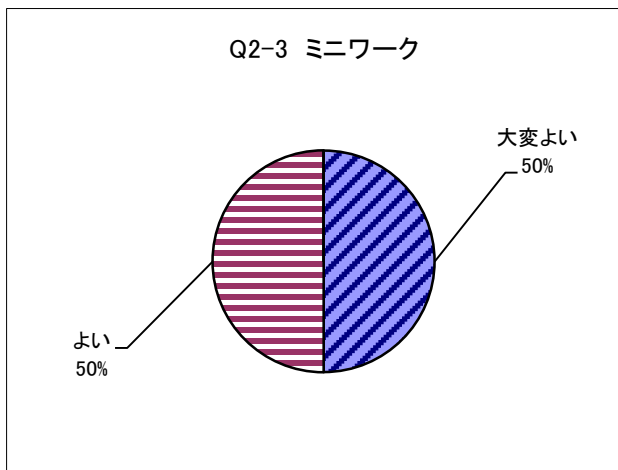


* 不十分であったと感じられた部分についてお聞かせ下さい。

導入としては十分だった
奥はもっと深いと思ったので。今回のWS内では十分だと思いました
ティーチング・ポートフォリオとアカデミック・ポートフォリオの違い、両方の必要性がよく判らなかった
メンターについてもっと説明してほしい
TP 作成の具体的な様子や How to をもっと知りたい
TP の実例を多く見てみたかった
TP のアウトプットへのイメージがつかめれば、もっとよかった

2-3 ミニ TP ワークはいかがでしたか

①大変よかった	22名(50%)	②よかった	22名(50%)
③よくなかった	0名(0%)	④全くよくなかった	0名(0%)



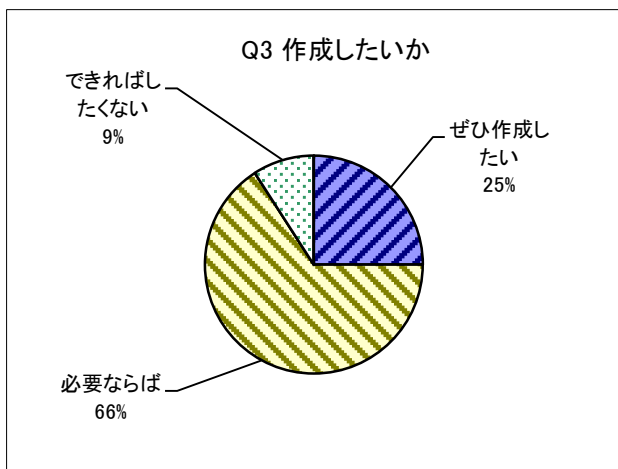
* 上記のように答えた理由についてお聞かせ下さい。

①	私がポートフォリオに対して考えていたことが概ね正しかったと知ったこと
①	日頃考えていたことが整理できた
②	振り返りができた
②	自分自身をふりかえることができ、目標を確認できたので
②	パートナーとの違いがよく分かった
①	具体的に理解できた
②	自分について考える機会は新鮮でよかった

②	表面的とはいえ、自分を見直すことができたから
①	他の先生に仕事について知ることができて興味深かった
①	自分でも気づかなかった理想の教員像を考える事ができた
①	自分の現状を把握できた
②	時間がもう少し長い方がよい
②	自分の取りくみを整理して考えるよい機会となりました
②	自分の教育に対する姿勢が明確になった。他の先生の教育に対する考えを知ることができた。
②	日ごろ意識していなかった自身の理念に近づくことができた
②	もっと時間をかけたかった
②	時間制限の中では十分だったと思う
①	もう少し時間が必要
②	今秋から始まる講義・実習の改善点が明確になった。時間がなかったので、“理念”について考えたり、将来ありたいとする姿を考えられなかった
①	TPの作成手順の一部(ほんの少し)ではあったが、イメージするのに役立った
②	日ごろ特に自覚せず行っている活動をいろいろ分析できたので
①	特に異なる学部の教員間でペアを組んだので、普段自分とは異なる業務を担当している方のTPは興味深く拝見できた。
②	自分の考えてきたこと、ほぼ無意識に行って来たことを振りかえることができた。

Q. 3 ティーチング・ポートフォリオを作成したいと思いましたが、

- | | |
|---------------|----------|
| ①ぜひ作成してみたい | 11名(25%) |
| ②必要ならば作成してもよい | 29名(66%) |
| ③できれば作成したくない | 4名(9%) |



Q. 4 ティーチング・ポートフォリオについてどのような印象を持たれましたか。

その可能性、限界、課題についてなど、ご自由にお書き下さい。

大学の段階まで学府レベルが上がると、教育にかかわる方も、受ける方も、行うべき”作業”が多くなる。もっと低年齢(小学生、中学生)の教育機関を対象にしたポートフォリオプログラムをつくり、実行すれば、少ない労力でシステムをつくることができるだけでなく、早くからポートフォリオに慣れていけば(うまいければ)頭の中にポートフォリオを描いていけるように(大学の頃には)なっていけるのではないですか？私は割合頭の中でできるので、このような”形”をもったものは、かえってストレスです。
たいへん有用に思いましたが、たいへんたいへんそうで、思い切るところまで行きません。
ちゃんと作成するのはしんどそう
難しさを感じたが、意味あるものだと感じた
非常に面白かったです。一般にFDというと、方法についての議論に終始してしまっている感じがしますの

で、理念や哲学的なものが共有できる場があれば良いのになと思っていました。先生、先生と呼ばれる立場の人(自分も含め)が、自分の方法(教育や指導)を変える(改善する)のは容易ではないと思いますので、5日間(3日間)の時間がとられるのはしょうがないのではないかと思います。若い教員は教育に興味を持たない方がよい(研究をやれ!)などと言われたことが何回かありますが、是非受けてみたいと思いました。大学院生バージョンは学生にすすめてみたいと思っています。
必要性がいまいち感じられない
普段意識していなかったことを理解できるのはいいことかもしれません
短い時間でしたので理解が充分ではありません。もっと長くお話を伺いたかったです。このような省察を本学でも活かしてみようと思います。
非常に有用な資料となりうることが理解できました
更新の機会が良いタイミングで持てれば、内省に活用できると思います
全ての人が行うのは難しいけれど、必要な物だと感じました
PDCAに使用する方法がわからなかった。教員の評価に使用するものが別に必要? 課題は教員の教育の質の向上にどうやって使えるかの所がよくわからなかった
自分が作成したTPが学生、社会からのニーズに合っていない場合はどうなるのかな? とは思いました
北野先生のポートフォリオを拝見した感銘を受けました
・TPの省察のメリット、その実例を知りたいと思った。・「WS」内の自己十分にならないだろうか。・理念の変化と教員力の関係を知りたい。
自己分析に最適と思いました
見直しの頻度や更新のポイントなども伺えたら嬉しいです
自分をまとめてみるとか、自分の teaching について深く考え、改善につながると思いました
どことなく無理やり考えをまとめさせられている感じがあるが、作成してみないと可能性までは分からない
ティーチング・ポートフォリオの評価(or 作成前後の自分自身の評価法はあるのか?) 現状、もうひと押ししないと、時間がかかりすぎると感じてしまった
有意義なものであるという印象ですが、少し大変そうであるとも感じました
省察にはとてもよいと思うが、昇進、転職時の判断材料には日本ではならないと思う
すばらしいツールであると思いました
教員としてのモチベーションアップに効果がありそうだと思います。ただし、自分にあまりカッコイイ理念がないので、はずかしい面もあります。
自身の考えを整理できるのは、教育にとって重要であると認識できた
「走りながら考えていたら、いつのまにか考えることをやめていた」そんな現状でしたので、今少し立ち止まり改めて理念等考えてみようと思いました。ありがとうございました。
自身の教育を振り返るために作成すべきものであると感じました。現状を自己評価するためには良いのかもしれないけれど、改善すべきこと、今後の課題でどこまで拾いあげられるのか、イメージがつかめませんでした
読み手の存在、使用目的による
大学教員は作成すべきと思う
日常業務の中で2泊3日の時間をどうやりくりするか、が一番の課題かと思いました。
自分自身を振り返るのに役立つと思う。評価に使用すると、振り返る資料として意味を持たなくなってしまうのが残念だ。
理念と技法の両者が必要だと感じました。
作るにより、いくつか目標がつけれると思ったが、重点をどれに置くかについては、むずかしいかもしれないと思いました。おもしろい方法だと思いました。
自分が行っている業務を客観的に見なおすことができる。必要な修正を行うきっかけとなる。
教員の資質向上に役立つとは思いますが、実際に採用の際、使用するのにはまだ疑問点が残る。客観的エビデンスがあっても、採用側に判断の幅をもたせることになり、客観性、公平性をどのように確保するかとの問題があると思われた。

以上

『終わりに』

FD 実施委員会 委員長
山岸 明彦

教員の資質は、大学における教育の質を決定的に左右する。この教員の資質を高めるというのが FD 活動の目的である。東京薬科大学 FD 実施委員会が主催する FD(Faculty Development) WS (Work Shop)は毎年ほぼ 1 回開催され、今回で第 4 回目になる。

本学 FD-WS の目的はいくつかあげることができる。第一に、薬学部と生命科学部、両学部の教員間の相互理解を深めることがある。両学部の教員は、顔をあわせることがあっても、話をする機会は少ない。話をする機会があっても、教育論を議論する機会はほとんど皆無である。WS では、教育論をかわす濃密な時間を共有する事、共同作業を行う事で、質の高い同僚意識の形成を目指している。

第二の目的は、大学教育論の最新の理論に触れる事がある。教育学とりわけ成人教育理論の進歩は著しい。今回の泉教授の講演でも、「日本の大学教育の失われた 30 年」という刺激的な表現で指摘された様に、世界における教育方法は大きくかわっている。また、北野教授の講演で紹介された様に、教員の教育課程そのものを客観化可視化する取り組み Teaching Portfolio も始まっている。「ガラパゴス化」した日本の大学教育の中で、東京薬科大学が他校に遅れる事なく「ガラパゴス化」を脱出する契機とすることが本 WS の第二の目的である。

第三の目的は、教育方法の中でも SGD (Small Group Discussion) を参加教員が実体験することである。教員がその教育方法を変えようとする際には大きな障害がある。その障害の最大のもは、教員自身が受けてきた教育と教育方法の呪縛である。大学教育課程を変えようとするという事は、すなわち現教員は教育課程変更前の教育しか受けていないことを意味している。本 WS では、成人教育において様々な長所を持つとともに、実施体験なしにはその意義も方法も理解しにくい SGD の実体験を得ることが第三の目的である。

本学 WS は、日本における薬学教育改革を主導するお二人（笹津学長、大野教授）のもとで、開始され回を重ねて来た。教育の成果が「学習者の行動に価値のある変化をもたらすプロセスである」と定義するならば、本 FD-WS は学習者である参加教員の行動に価値のある変化をもたらした事は、参加者の各報告を見れば間違いが無い。そういう意味で、大変有意義な WS であったと言える。タスクフォース、事務局各位および積極的に参加した参加者各位に感謝し、敬意を表する。

平成 26 年 10 月